

越谷市郷土研究会
第307回 史跡めぐり（半日コース）

大泊安国寺の円空仏と観音堂の額絵馬

月 日 平成14年10月19日（土）

集 合 せんげん台駅東口 午後1時30分

コース せんげん台駅東口 → 戸井橋・新方領耕地整理記念碑 → 那倉官三郎屋敷跡 → 桜井小学校 →
(須賀用水掛樋跡) (稻荷社)

安国寺 [トイレ休憩] → 名倉善兵衛屋敷跡 → 会の川跡 → 大泊慈眼寺 → 越谷北高校 →
(円空仏、他) (千住名倉の出身地) (旧利根川河道) (観音堂の絵馬)

児童館コスモス → せんげん台駅
(解散)

案内者 常任理事 高崎 力

1. 桜井地区の歴史上の記録

延久元 (1069) 大相模次郎能高 没・・・武藏七党
 の一つ野寺党の一族
 (現在も大相模地区に27代目の
 子孫が住居)

平安末～鎌倉(1170頃)現在の埼葛地方は鳥羽天皇の第3皇女
 八条院の荘園となる
 在地の庄司は下河辺氏・・・後に

源頼朝に従う

この頃の下河辺庄は「下総国下河辺庄」
 で「前林」「河妻」「赤岩」「桜井」
 「春日部」など利根川の流路に沿って
 いた地域の総称

寿永3 (1184) 源頼朝は伊勢神宮に大河戸御厨を寄進
 永仁元 (1293) 今の埼葛南部一帯は金沢称名寺領
 嘉元3 (1305) 「新方郷」は金沢氏領・・・(金沢氏は

北条氏の分家)

嘉暦元 (1326) 金沢称名寺文書に「新方検見帳」あり
 貞治2 (1363) 称名寺領
 明徳3 (1392) (南朝北朝合一の頃) 大泊村福寿山慈眼寺
 の開山僧慈栄 没・・・大泊の集落が形成

されていた

享徳3 (1454) 一ノ割香取神社の鰐口銘に「新方莊」
 長禄元 (1457) 太田道灌 岩槻城を築く
 寛正5 (1464) 大泊大龍山東光院安國寺開山 専故 没
 (中興開山ともいわれる)
 (1467) 応仁の乱
 文明6 (1474) 長宮 大光寺鰐口銘に「新方庄」

文亀4 (1504) 武州埼西郡八条領主八条兵衛尉が下総国葛飾郡
東新方領主向畠城主新方次郎大夫頼希を攻略
清淨院高賢上人は岩槻に逃れる
(栄広山由緒著聞書より)

永正18 (1521) 高賢上人は岩槻の加勢を得て八条兵衛尉を敗走
させる (同上)

上記争乱の前後に利根川本流の変遷があり現在
の吉利根川が定着したものか、従って国境と
支配者の交代も考えられる

{新方領} 下総国→武藏国

永禄5 (1562) 「越谷」の名称が北条氏印判状に記載

2. 河川と道路

(1) 利根川の流路・・・自然的移動

- a. 古隅田川 (春日部→岩槻)
- b. 会の川 (平方→船渡) 大泊の形成
- c. 吉利根川 (春日部→吉川)

(2) 荒川(綾瀬川)の流路・・・人工的瀬替

- a. 今の綾瀬川筋が荒川の本流か、足立郡と埼玉郡の境界
- b. 備前堤を造成し荒川本流は現在の元荒川筋へ流す(寛永頃)
治水と新田開発 伊奈備前守忠次
- c. 熊谷久下にて荒川本流を入間川筋へ流す 寛永6(1629)
伊奈半十郎忠治

文化8 (1811) 江戸本町二丁目 式亭三馬発売の「江戸の水」は大ヒット商品。その化粧箱は大泊村箱屋長八と

浅草福井町箱屋利助が五千余箱を納めていた

幕末の頃 船渡新田のダル吉なる者「達磨」を生産する

その場所は「ダルマ屋敷跡」として今に伝える

それ以後 船渡、間久里、大里、大房、大沢、袋山

大道、砂原の他 岩槻末田、春日部大場等で

武州ダルマ・張子玩具が製作され 川崎大師、

湯島天神、亀戸天神、柴又帝釈天、西新井大師

の他 茨城、群馬、千葉の市日に出荷販売された

4. 現代(明治以降)の桜井地区

明治期になって間久里の「大蔵ダルマ」「船渡の
張子」玩具は有名品となる

明治12 (1878) 第1回埼玉県会議員の選挙あり、大泊村
那倉官三郎 当選

明治11、12(1877)越谷産「太郎兵衛輪」東京正米市場で最高値

明治22、4 市町村制発足 新方村、桜井村、大袋村など誕生

明治40 平方の小早川庄吉氏の麦稈真田商 写真入りで
新聞紹介される

明治末～大正初 「新方領耕地整理事業」・・・「全国一面積広く
経費少なく、効果大」

大泊一賛成・反対両派対立(二毛作可、堰堤と

用排水あり)

平方一反対(江戸末期に耕地整理済・主旨反対)

間久里一賛成

大里一賛成

現在の市街地の基盤となる

大泊安國寺

(越谷市の史蹟と伝説より)

大龍山安國寺 芝増上寺末 観安國寺縁起によると、次のように述べられてくる。

大龍山安國寺はもともと船谷蓮生坊の営んだ草庵であった。現在の本尊阿彌陀如来は専心僧都の作と伝えられ、これは蓮生坊が法然上人より譲られたもので、蓮生坊がはるばる京都より真仏として背に負うて來られたものである。この頃の安國寺は寺とは言えぬ小さなお堂に過ぎなかつたが、足利尊氏が全国六十六国に安國寺を建立した際當時も武州安國寺として指定された。これは尊氏が郷里に程遠い熊谷から出た蓮生坊を尊敬し、蓮生坊と因縁浅からぬ当寺を重んじたことからだらうと考えられる。これは貞和元年（一三四五年）のことである。このようにして当時は一国一寺として栄えるようになつたが、その後戦乱うち続く世代となり、当寺は荒廃してしまつた。この頃紀州熊野の寺故上人が諸国修行の際当地を訪づれ由緒ある当寺の荒廃ぶりを驚き現在の坤（大泊）「それまでは上間久里にあつたといわれている。」に再建されたのである。この寺故上人は寛正五年（一四六四）になくなられている。その後徳川幕府の時代に入り、当寺が芝増上寺の末寺として代々将軍家より御朱印状を受領することになった。しかし江戸末期より明治初期にかけて仏教信仰は撤遠され當時も非常にみじめな状態に追い込まれたが、この時の住職となつた慈善上人が苦心し、現在の本堂を明治十五年に完成され今日に至つたものである。

昭和35年

大龍山安國寺の歴史にはこのように述べられてくるが、当寺が、足利尊氏によって建立された六十六國中の一寺として指定されたかどうかは不明である。当時の時代的資料からすれば、林西寺より遙かに古いことは事実であるが六十六國に建立した際の安國寺であるかは確証がない。確かに年代的に考察すれば、尊氏の癡願による建立年暦応二年（一三三九年）とあまり遅たましく、寺を安國、塔を利生と委せんとして勅許された康永三年（一三四四年）庚午五年」とほほ一致し、六十六國の安國寺が十四世紀中に全部完成した年代と一致するが元来常陸上野二國は存置されたかどうか曖昧であり、武藏紀州（伊）大和河内越中尾張の六国は存否不詳とされてゐる。又新しく造営した安國寺は少なく、料所を寄進して在来の寺塔を修補するに止つたものが多かつたとされている。従つてこの安國寺は足利尊氏願望により建立された六國中の一寺ではなく、寺故上人からの存在ならと考えてよいのではないかだろうか。ただどう考えると寺故上人が紀伊の人で紀州朝野安國寺の住職であるとする点に疑問が生じて来るのである。即ち、紀伊には安國寺の存否が不詳であったとする学者の説から考へてである。とにかく寺故上人以後とみてよいであろう。新編武藏風土記によれば、「安國寺は紀伊国熊野路大泊村の安國寺の住職就養専故が康安元年一寺を建て安國寺と名づけた。」と記されている。

（三六一）

重要文化財 越谷市の史蹟と伝説
発行日 昭和35年4月15日
編集兼発行 越谷市教育委員会
越谷市文化観覧室委員会

安國寺の円空仏

えんくうぶつ

円空さん 近世(江戸時代)は仏像彫刻の不毛の時代といわれ、わずかに宝山湛海、木食と円空の三人をあげ得るにすぎない。

この三人は、いずれも僧門の人で専門の仏師ではない。円空と木食の仏像は、彼らの行脚した各地に残されており、強い個性を發揮した独特の作風で、近年とくに愛好者が多くなっている。

円空は寛永九年(1632年)、美濃国中嶋郡中村に生まれた修驗者(山伏)であって、圓城寺の尊榮を師として修業した。

尊榮は、もと法隆寺で修行した人で円空もまた同寺で法相を修めたので、この時期に仏像の基礎を充分得したものと思う。

その後大峯山において難行苦行し、全国を歩んで貧しい人を救ったといわれる。

元禄八年(1695年)岐阜県関市弥勒寺前の長良川畔で生定(五穀を断つて聖人となる)に入る。年六三歳。

円空仏 あまり堅くない生木をナタで二つとか、四つに断ち割りし、ノミ使いは非常に早い速度で、サクサクとダイナミックに切つていった。

生木は後に風化してギュッと縮まり不思議な効果ができる。材木は主にスギとかヤマブキ鉄砲みたいな柔かい生木を使っている。乾燥すると非常に軽くなるのが特徴である。



楊柳観音坐像

円空仏の分布は関西、中部、関東、東北、北海道に及び、現在一八都道府県に約四〇〇〇体がある。

越谷市近辺では大宮市がもっとも多く、岩槻、春日部、八潮に散在している。

安國寺の円空仏

楊柳観音坐像(写真) 七〇・五センチメートル、台座右側に水瓶に挿した

楊柳を、左側に龍体を彫る。台座下端には狐、魚、水鳥らしきものの線彫りがある。建築用材に彫刻したもので生木ではない。延宝八年(1680年)頃の作と推定。

童子立像 五一・八センチメートル、密印を結んでいるが下半身は丸く磨滅している。次の善女童子と同一桐材の半分。元禄二年(1689年)頃の作と推定。

善女龍王像 五二・〇センチメートル、頭上に龍を載せた觀童像で、宝珠をもち前の童子立像と同一桐材の半分。

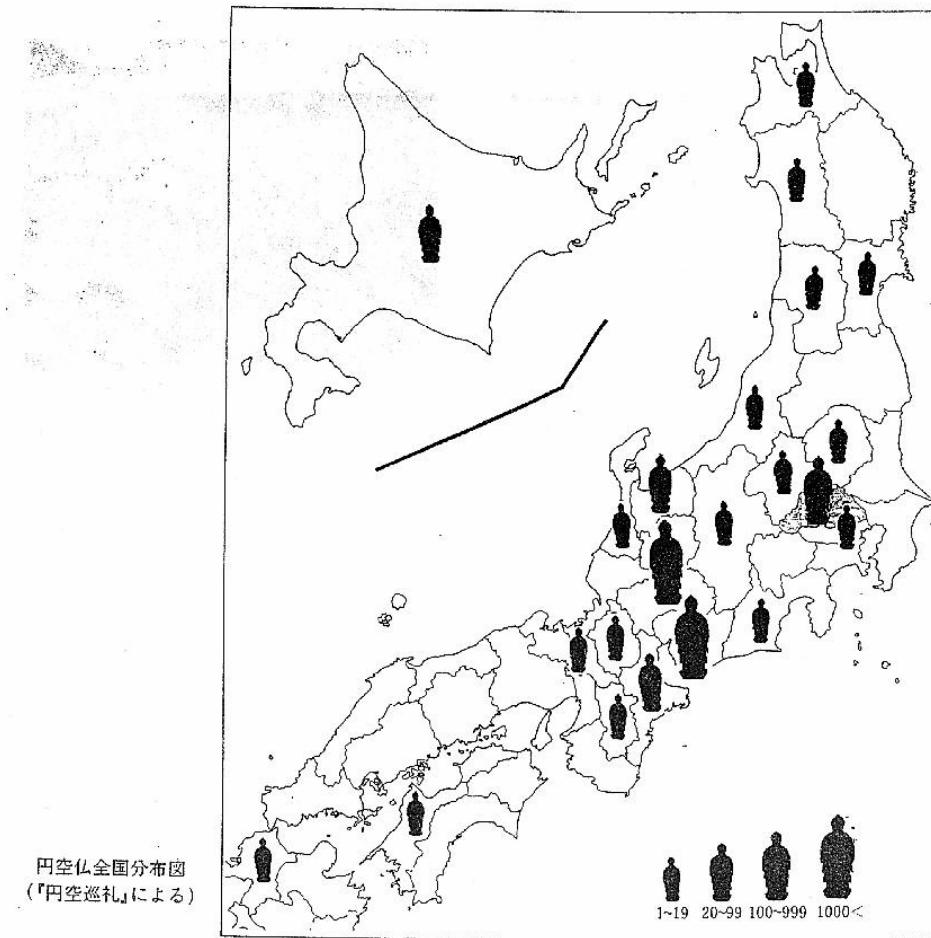
安國寺の円空仏は、全国的にも稀にみる珍品である。

楊柳観音は全国でも数少ない堅い建築用木材を使っていること。下部に鳥獸魚を配例した類は他にないといわれている。童子、善女の二体は桐材を二つ割りにした像で、桐材の使用もまた全国的に類例がない。

円空仏が当寺になぜあるのかは全く不明である。円空仏の編年作業は現在円空学会を中心に進められており、それからして彼が関東を通ったのは寛文、延宝、元禄の三回と思われるので、奥州街道筋に近い安國寺に立寄り彫刻したものと考えられないでもない。

円空の足跡

江戸時代前期、寛永 9 年（1632）に美濃国に生まれた円空は、元禄 8 年（1695）に現在の岐阜県関市にある弥勒寺で64歳の生涯をとじるまで、日本各地を巡り、おびただしい数の木造彫刻を遺した。円空の遊行僧としての足跡は、北は北海道・東北から関東・中部・東海そして奈良など畿内にまで及び、旅の途次、農民や漁民の信仰にこたえて仏・神像を刻みつけた。現在、全国で確認されている円空仏は4500体余り、「鉈彫り」と呼ばれる特異な省略技法による簡潔な彫像は野趣にあふれ、それまでの仏像様式にない独特な作風を生み出した。円空が初めてノミをとるのは、寛文 3 年（1663）岐阜県美並村でのことであり、これ以後修行と造像の日々が始まる。旅そのものを修行とした円空の足跡は、慈愛と祈りの造形として今に伝えられている。



西福院の円空仏

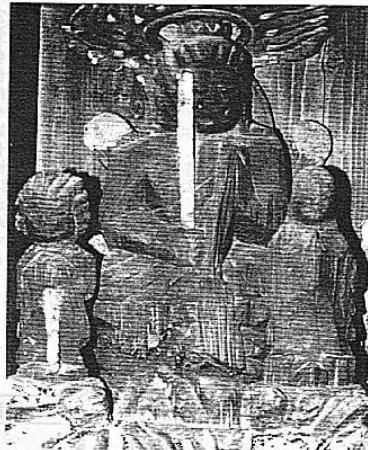
市指定・彫刻

昭和61年2月26日指定

●越谷市谷中町3-90 (西福院)

円空は、大泊安国寺の円空仏すでに述べたとおりの修験僧である。谷中の真言宗西福院の円空仏は、主尊が不動明王(高さ47.6cm)、脇仏が制吒迦童子(高さ23.2cm)、持瓶羅童子(高さ24.2cm)、であり、3体とも杉材を利用したもので、円空仏の中でも優れた作品とみられている。

円空仏は、いずれも荒々しく刻まれているのが特徴で、素朴な美しさと力強さを感じさせる独特な彫刻技法で親しまれている。



弘福院の円空仏

市指定・彫刻

昭和63年2月27日指定

●越谷市北越谷1-21-26 (弘福院)



円空は江戸初期の遊行僧、美濃国竹ヶ鼻の出身、幼年にして仏門に入密教を学び白山頂上などにこもって修行を積んだが、富士山頂での修業に靈感を受け仏像12万体を彫ることを念じ、全国各地に木彫仏を残したこと知られる。

このうち、埼玉県内に残された円空仏は元禄2年(1689)日光登山の途次に彫刻されたものといわれる。北越谷弘福院に安置されている円空仏は、如来坐像の1体で優れた作品とみられている。(像高36.8cm)

秘佛 不動明王坐像

【法量】

像高 一〇五・〇 像幅 五二・〇 像奥 一三・〇

【概要】

頭上蓮を彫出し、弁髪を崩し、右手に宝劍、左手は眉索を執つて雙座上に坐す像である。

最大径五〇cmをこえる桧材の木裏部に彫刻、表面は大きく平のみで仕上げ。芯は左胸前に当っている。この木芯は底部に少し残るが、上半身は細身になるため体幹部からは外れている。左脇部は一部欠損するが当初からのものと思われる。両牙は右上、左下に向く。左牙歯脇に径一cm程度の穴があいている。背面左後に朽損部が一条、深くくい込んでいる。底部に二か所縫が打ち込んであるが用途は不明である。頭部がやや大きを感じるが、一寸を超す像であるため大いに迫力を感じる。



安国寺の円空仏

市指定・彫刻

昭和50年5月2日指定

●越谷市大泊910（安国寺）



円空は、寛永9年(1632)美濃国竹ヶ鼻中村(現岐阜県羽島市)で生まれ、若くして仏門に入り修験道圓城寺の草栄を師として修業し、その後白山や大峯山で修業を積んだが、富士登山にあたって生涯に12万体の造像を発願し、以来全国各地を周り、仏像を彫刻し残していく。元禄8年(1695)63歳で美濃国弥勒寺で入寂する。

県内に残された円空仏は、円空が元禄2年(1689)日光に向う途中のものといわれ約130体確認されている。安国寺の円空仏は、主尊が楊柳観音坐像(高さ70.7cm)で、脇仏は童子形立像(高さ52.2cm)、善女形立像(高さ51.0cm)の3体であり、全国的にみても稀にみる逸品といわれている。材質は、楊柳観音坐像が堅い建築用廃材を、他の2体は全国に類例のない桐材が用いられている。

内藤勝雄氏

昭和62年3月刊行の「美術工芸品彫刻」

所在緊急調査報告書Ⅲ」(埼玉県立博物館)

慈眼寺の由緒 「大泊の觀音様」

安國寺より東方へ約一千ロほど行ったところに慈眼寺と觀音堂がある。参道の入口に花崗岩の

鐵立が一対、そこを入ると奥き当たりが觀音堂、そしてその右に慈眼寺がある。

慈眼寺の開基については『江戸淨土宗寺院史料集成』に依るが、慈眼寺の開基によると明応九年（一五〇〇）に舟舉慈眼和尚が当山を開いたと記載されている。当寺は安國寺末にて、安國寺の住職が兼務していた時代もあり、住職の系譜もつまびらかでない。

舗装された参道の左側、松の大木の下には寛保元年（一七四一）の笠侍六角地蔵供養塔をはじめ、享保十年（一七二五）の八臂十一面の觀音像刻供奉塔、寛政九年（一七九七）の寺田金剛丈宇安中塔など、いくつかの供養塔が並んでおり、古くから信仰の厚い寺であることが察せられる。正面に觀音堂が位置しているところみると、信仰の中心は觀音菩薩であって、慈眼寺といふより「大泊の觀音様」といふならむわれていることからもそのことが察せられる。この觀音堂は左甚五郎の建造の伝統を承じている。

その伝説とは左甚五郎がもと一面の杉林であった当所を訪れ、石に腰をおろして休んでいたが夕暮れになるとともに杉の木を數十本切り倒した。切り倒された杉の木は自然に動き出し、「一夜のうちに觀音堂が建てられた」といふ。翌日思ひがけない豪雪の出現に驚いた村ひとが多勢集ってきたがこの堂には朱が塗られてなかったので、ひととは朱を入れたためが何故かにある筈だと探し廻った。ところが堂の傍の桟の木に「朝日さす日輝く花の下」との歌が記されていたので、その場所を撮ったところ、朱を入れたのが出てきた——という話である。これに似た伝説は何處にも数多くみられるので真偽のほどはさだかでない。

前述に従うと元禄間から元明間にかけて「觀音坊」なる建物があったとされているが、詳かな記載はない。慈世哥の宮殿が今から二〇年前の享保三年に方舉比丘願主となり、宮大工、石川太郎兵工がこれを造ったと傳わる。これから類推すると觀音堂はかなり古い建物と思われる。宮殿には千手觀音が祀られ、信仰する者が多く、近隣の信者で觀音講をつくっており毎日（九日）には堂内で觀音經を唱える大祓の音が聞こえる。またこの觀音様は秘佛とされ、十二年に一度しかお姿を尋ねることができない。せからばぬしの信仰が篤く、午牌に大開帳が行われる。近郷近在の善男善女が鐘をつらねて参詣し、出店もあり賑わいを呈している。堂内には明治期のものとみられる出店や参詣人でうずまつた觀音堂は、日の服わいを施した船馬（越谷市指定文化財）が掲げられている。当時の風俗を知るうえで貴重な奉納絵画である。

□觀音菩薩のお姿

慈眼寺・觀音堂の佛さまは千手觀音菩薩である。

脇高の蓮台に坐し、飛天の舞う後背をつけ、頂上に十一体の化佛を頂く、高さ六〇センチ程の觀音様である。胸前中央に真手合掌、その下部に掌を重ね合わせた印相、そして左右に教呪すの勝手、それには蓮華、輪宝、宝珠、呪、劍などを持つている。秘佛なので普段は見られない。

千手觀音の「千」とは広大無邊を意味し、「手」は働きを表わしている。拔苦与樂（苦しみを取り除き楽しみを与える）施無畏（こわがらなくともよい）と呼びかけている佛様である。

觀音様のお参りの仕方

- ①「心」にて、手、口を清める
- ②拜殿の前に立ち、頭口を二つたたく
- ③拜殿にあがり、掌戒をあげる
- ④掌戒を含ませ觀音様に正対する
- ⑤「慈悲」と「心」を發達させる
- ⑥「慈悲」と「心」を發達させる

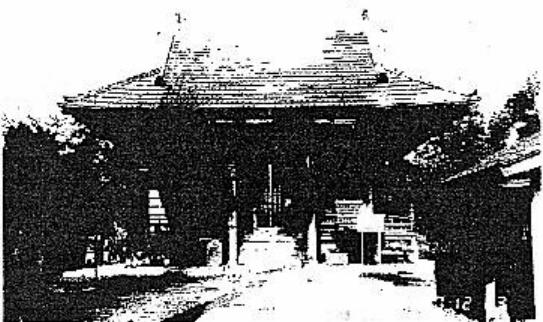
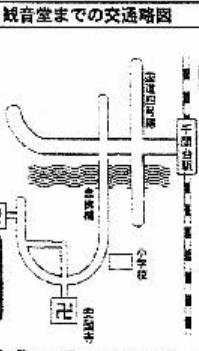
觀音様や無芥心祭を啓てる人もあるが一般の方はむずかしいので

「延命十句觀音聲」を唱えるとよ。

觀音聲 南無佛 般若波羅蜜多

德法優殊 常樂我淨 朝詔觀音聲

慈念觀世音 佛心從心起 慈念不動心



東京方面・新宿方面 東京方面・新宿方面 徒歩二五分 タクシード二十分

福聚山 慈眼寺

越谷市天子大泊一〇番地

接骨医 千住の名倉 基本年表

高崎 力

秩父氏（略）

嵐山氏（略）

初代 名倉行家（一四五九—一五二二）

（北条早雲の小田原城主大森信濃守攻略に参加）

二代

名倉元重（一四八三—一五一）二十四世秩父平太郎元重娘二人を川越次郎太夫重常と江戸五郎左衛門へ嫁ぐ

三代

名倉重秋（二十五世嵐山三郎太夫重秋）居を秩父郡矢畑に移す

四代

名倉重親（二十六世嵐山三郎兵衛重親）居を秩父郡奈倉に移す

五代

名倉重清（二十七世嵐山奎頭重清）

六代

名倉重則（一五二九—一五七〇）二十八世嵐山三郎重則（北条氏政麾下。永禄十三年（一五七〇）武田信玄奈倉城を攻め重則（42歳）戦死。子の名倉数馬之助重治は武州岩槻淨安寺（二代元重の子慶周が僧であつた寺）に落ちのびる。島山、秩父の姓を棄て、大治村（越谷市大泊）を開拓し、名を善兵衛と改める。元和二年（一六一六）没）

七代

名倉重治（島山、秩父の姓を棄て、大治村（越谷市大泊）を開拓し、名を善兵衛と改める。元和二年（一六一六）没）

八代

名倉善兵衛（貞享四年（一六八七）没）

九代

名倉六兵衛（正徳元年（一七一）没）

十代

名倉重方（一六六八—一七二七）千住名倉初代。江戸千住に住む。名を弥次兵衛と改め

十一代

名倉重直（農家として暮らす。享保十二年五月二十五日没（80歳）敷地一万坪。）

十二代

名倉重方（弥右衛門と号し宝暦十一年（一七六一）三月十一日没）

十三代

名倉勝右衛門（女主人）宝暦九年（一七五九）六月二十一日没

十四代

名倉直賢（一七五〇—一八二八）骨つき名倉の始祖。

一七七〇

明和7 ）の頃直賢骨つきを開業。

一七七一 明和9 二月二十九日目黒行人坂より出火し三日間江戸市内を焼く。この火事で23人治療す。この時薬と芸者の治療費はタダとす。後に仕事師、経営者、相撲取、帮間まで無料を拡大。

一八一五 文化12 十月二十一日千住宿で酒合戦あり。直賢は谷文晁、蜀山人、龜田體齋、酒井抱一らを同道す。

一八一八 文政1 直賢次男知重日本橋元大阪町に名倉分院を開業。

一八二七 文政10 知重の日本橋名倉、相撲取りと役者のみ治療費無料とする。

一八二八 文政11 七月四日業祖直賢没（79歳）

一八三四 天保5 千住名倉良昔の長男勝介勘当され、伯父知重は近くの猪俣町に接骨医を開業させ。勝介を猪俣町名倉と呼ぶ。

一八三九 天保9 九月猪俣町中村町の「五条橋弁慶」で菊五郎は橋から落し観客席の知重（日本橋名倉）は梁屋へ走り応急手当をした。

一八四三 天保14 一月猿若町市村座で中村勘藏（後の三世仲蔵）舞台で膝を打ち日本橋名倉で

治療

以下略